

宗教映画『毛綱』の成立過程

中 川 剛

はじめに

関東大震災後、昭和恐慌を経て昭和三年には治安維持法が公布され、政治史としては「大正デモクラシー」が下火になり、非合法下の日本共産党員の検挙など思想に関する弾圧は厳しくなった。わが国に戦争の足音が近づいてきた頃、大衆文化としての無声映画はピークに達していた。⁽¹⁾ 言論の場を失った「シユギシャ（主義者）」と呼ばれた平民社の流れを汲む社会主義者や大杉栄の薫陶を受けたアナキストは文芸誌や映画界に入り込み、映画界はヤクザから国粋主義者、アナキストにいたる右から左までが雑居し、映画界を支えていた。映画界に思想的区別はない。売れる映画を作れば神さまなのである。

震災を免れた関西の映画界は時代劇を中心に阪東妻三郎や嵐寛寿郎などスター俳優が銀幕を彩り、一方では中小プロダクションが次々と勃興し鎬を削っていた。映画が興行的に当たると大きな利益になるが、外れるとすぐに大き

な借金になってしまふ世界である。その中には二、三作で倒産した映画会社も少なくない。その後、これらの弱小映画会社は大手の映画会社に大半は身売りすることとなり消えていった。

国産映画は明治三二年から製作されたが、初期の段階では写真が動くという物珍しさに興行は成り立っていたが、試行錯誤を繰り返して撮影技術が向上し、ストーリー性のある映画が作られるようになった。これに注目した文部省は、明治四四年ころから活動写真を教育に活用することを計画し、同省に通俗教育調査委員会を設置した。前年の大逆事件がきっかけとされる。²¹ 国家体制に反逆する者が出ないように学校教育から見直さねばならないという危機感があった。この頃は、各映画会社が申請した映画を文部省が教育映画と認定するものであり、映画会社にとって申請作業の労力の割には、興行収入が増えるわけではないので、不評で教育映画は各社が自発的に製作されていた。大正八年、「日本映画の父」と称されるマキノ省三が教育映画の請負製作を主とするミカド商会を設立し、教育映画を撮り始め、大正一〇年には京都の等持院の境内で牧野教育映画製作所を旗揚げした。マキノ省三は多くの教育映画や宗教映画を撮り、それらの映画は各宗派も映画を教化の手段として取り入れ、布教伝導は技術革新をもたらした点では特筆すべきことである。

本論文で扱う昭和四年製作、宗教映画『毛綱』も日活から独立し、マキノプロダクションで製作した最晩年のものである。

一 真宗大谷派と映画宣伝

一 国産の活動写真

わが国の映画製作については田中純一『日本映画発達史Ⅰ―V』（中央公論、一九八六年）に詳しいが、初期の作品としては歌舞伎や舞踊、名所を写したものを数巻と映写機を携えて各地を巡業興行するのが主流であった。見世物興行と変わりなく、一つの場所に七日ほどの興行しか打てなかったという。明治四〇年ごろになると映画製作が盛んになり、各地に常設の映画館が建てられた。映画製作も土間に蓆を敷いて簡単な書き割りを設置し、歌舞伎や講談、義太夫の一節を題材に役者がバタバタと剣を振り回す程度の物であった。手探りで製作が始まった映画は、編集の“カット”すら知らなかった。マキノ省三製作『明烏夢の淡雪』にはこんなエピソードがある。この映画には、雪が降る場面があるのだが、雪に見立てた紙吹雪を降らせている途中に紐が切れ、籠が役者の頭に落ちてしまったという。編集する技術の無いマキノは、そのまま上映することになった。心中事件が題材なのであるが、その場面で爆笑が起きてしまうのである。見るに見兼ねた映写技師が「カットしてはどうですか」とマキノに進言した。それでマキノは始めてカットを知ったという。このような失敗を繰り返しながら黎明期の映画技術は向上していった。

映画の興行は常設館側が大きな権限を持っており、日本独特の無声映画に説明者（活動弁士）を立てて上映する

際、説明者が“やりにくい”という事で脚本（スジ）に文句を付けることが多く、輸入映画のような写实的な映画を撮ることが出来なかったという。近世以降の慣習として興行には土地の顔役の許可が必要であったから、やくざが映画界に入ってきたことも自然な流れであった。また、思想弾圧を受けた社会主義者やアナキストも見識の高さや語学が堪能であるという理由から映画界に引っ張られた。初期の頃は、映画会社に入るという事だけで、親に勘当されたり親族会議が行われるほど卑しい身分とされ理解されなかったという。映画文化は芸術文化として始まったのではなく、下層社会から発展を遂げていった。

大正期にはいると、舞台劇のような大見得を切る演出からリアリズムを重んじた演出が取り入れられ、純映画劇が撮られるようになった。活動弁士によって利益が左右される時期から、俳優や脚本が主体の映画に移行し、スター俳優が登場するなど映画は見世物から大衆娯楽として受け入れられていったのである。

一方、映画は報道としての有用性も認められるようになった。吉沢商店が明治三三年の北清事変に際して、撮影技師を派遣して従軍しながら撮影した『北清事変活動大写真』の興行は大成功し、各主要都市でも披露興行を行った。この他に吉沢商店は『小松宮彰仁親王葬儀実況』『明如上人葬儀実況』『五代目尾上菊五郎葬儀』『日露戦争活動大写真』などを製作した。特に『日露戦争活動大写真』は各地区の戦況を間断なく撮影し、国民に戦地の状況を伝え、常設館は連日連夜客止めが起きるほどの盛況をみせたという。⁽³⁾

二 文部省と教育映画

このような映画の発展に政府も注目し、明治四四年五月一日、文部省に通俗教育調査会を設置した。通俗教育とは社会教育の事である。桂太郎内閣の文部大臣小松原英太郎の発案で委員には学識経験者二五名が任命された。設置に踏み切ったのは、前年に起こった天皇暗殺計画を企てたとされる大逆事件で被告二四名中一二名が死刑になり、一二名が無期懲役となるなどして、世間に大きな衝撃を与えた。国家に反する思想、行動の芽を摘むために通俗教育を善導する目的があったのである。その後、帝国教育会が児童に及ぼす活動写真の影響を調査に乗り出したのは大正六年一月で、七月には東京市管轄内の常映館に「活動写真取締規則」が警視庁令として公布された。この条文には活動写真は児童に悪影響があるとして興行映画を一五歳を境目に年齢によって区分けし、甲種・乙種フィルムという基準を設けた。甲種は一五歳以上を、乙種は一五歳以下が入場することができ、乙種の映画は恋愛や犯罪を誘発するものは認められなかった。この規則は興行側の反対が強く、また、年齢を偽る者や、芝居小屋に流れる者が多く全く効果が無かったとされる。二年後には甲乙という区別は撤廃された。⁴⁾

政府の中でも映画は社会にとって害悪を及ぼす物として規制すべきという意見と、社会教育には有用であるという意見があり、文部省は積極的に活用することを選んだ。しかし、「文部省認定」と銘打っても客が入る訳ではないので、敬遠される事が多かったという。

大正七年、シカゴの商業経済局の依頼で文部省が援助し、帝国教育会が映画製作に当たったのが本邦初の文部省製作映画『日本の特産物』八巻である。この映画は富士山や北アルプスを背景に「養蚕」「製茶」「竹細工」などを写

したものであったという。⁽⁵⁾

また、教育映画が発展するには技術革新も必要であった。携帯用映写機の普及である。当時の映写機はアルコールを使用するため上映館には防火基準があり、運搬するにも不便であったが、大正八年頃からアメリカのデブライ社製の手提用のトランク型密閉映写機が輸入され、翌九年から同型のアクメ社製の携帯用映写機が輸入された。これらは家庭の電灯線から光源が得られ、左右三メートルにまで拡大映写ができたので、劇場以外の学校や公会堂などの映写活動には非常に便利であったという。この映写機の普及によって、各地の企業や中小プロダクションが次々と自作の教育映画製作に参入して、小学校や工場を巡回するに至った。真宗大谷派が採用したのはデブライ社製の映写機であった。⁽⁶⁾

大手映画会社も独自に道徳的な映画を撮り始めていたが、その中でも、マキノ省三が興した牧野教育映画は各宗教教団に宗教映画という新たな布教活動を提示した点ではその功績は特筆すべきものがある。

三 牧野教育映画の創立

マキノ省三が教育映画を作る決意をしたのは、自身が製作する活劇や忍術映画に児童が影響され犠牲が出たことであるという。今では考えられないが、一週間に一本という驚異的な速さで映画を製作していたマキノは、社会に資する映画製作を志したのである。ここで、マキノ省三の経歴を少し触れてみよう。

マキノ省三は明治十一年九月二二日、京都市外山国村に父・藤野斎と母・牧野弥奈の三男として生まれた。幼少

のころ、母方の養子となり牧野姓を名乗った。養家は京都市西堀川の左官屋であったが、母は実家を出て、西陣の劇場千本座の敷地約三百坪の地主として、その地代で生活した。千本座の座主が経営を失敗して劇場を手放し、母と共に千本座を経営するようになったのは二五歳の時だったという。母・弥奈は義太夫の師匠をしていたこともあり、そのような家庭環境で育ったマキノ省三は義太夫に長け、公演する脚本を“口ダテ”で演技指導し、その才能を横田永之助（一八七二—一九四三）に見込まれ監督になった。横田は若い頃アメリカに渡り、英語と商法を学んだ。帰国した後、その語学力を買われ、アメリカで開かれるコロンプス記念世界大博覧会の京都の出品委員を依頼されたという。この博覧会の出品物のX線に目を付け、日本に帰って「エクス線」と銘打った興行が成功し、興行の世界に入ったのである。その後、活動写真の輸入をして巡回興行を行っていたが、入手できるフィルムが限られていたため、自前で映画を製作することを思い立ち、脚本と演出もできるマキノに依頼したのである。国産映画も明治三三年頃から作られ始め、横田にも自作の映画を製作したいという焦りがあったという。試行錯誤を繰り返して、明治四一年マキノ省三の初の監督作品『本能寺合戦』完成し、東京神田の錦輝館で上映された。この作品を機に映画界に入ったマキノは尾上松之助を発掘し、スター俳優に育てた。松之介の生涯出演作品数は約一千本という驚異的なものであった。

横田が経営する横田商会は明治四五年、吉沢商会・Mバテー・福宝堂と合併し、日本活動写真株式会社（日活）となった。横田商会は経営が健全であったため、合併には消極的であったが、四社のトラストに巻き込まれたという。マキノは横田に従い日活に入社し、京都の日活関西撮影所の所長となった。この頃になると、マキノも映画の

編集を熟知し、カットバックを取り入れた忍術映画を製作し、日活の時代劇を牽引するようになっていた。印を結ぶと消えるといった簡単な映像トリックであったが、この忍術映画に影響された子供が映画の真似をして大怪我をするといった事故が社会問題となった。マキノは忍術映画の製作に消極的であったが、日活は興行が当たっている事を理由に製作を続けさせた。

大正八年、マキノは日活関西撮影所の所長のまま、ミカド商会を自宅に設立し、教育映画を製作することになる。日活が稼ぎ頭のマキノ省三の退社を拒んだために、苦肉の策として、ミカド商会は日活の助監督金森万象を支配人として置き、日活が製作を請負うという形で設立したのである。

第一作は『處女會表彰紀念式』で内務省の委託で広島県沼隈郡の處女會表彰式を映画化する実写ものであった。処女会とは、義務教育を卒えた一二歳から二五歳までの未婚女性で構成され、教育者・天野藤男を中心に鳩山春子、山脇房子らが推し進めた女性の社会教育を目的とした運動であった。この効果を宣伝するために作られたものである。二作目も内務省の委託で、天野藤男・原作『都に懂れて』が撮られた。都会に懂れた田舎娘が都会に出てくるが、都会の華やかさは幻想だったことに気付き、帰郷して落ち着いた生活に戻るという内容だったという。三作目は『忠孝の亀鑑きかん 小楠公しょうなんこう』で楠正成を扱った時代劇で、桜井の訣別より四条噺戦死までを描いた作品であった。

この三本は大正八年一二月に御茶ノ水の東京教育博物館で、文部省主催の第一回活動写真展覧会で上映された。教育映画と銘打っていたが、内容が娯楽的要素を持っていたため、絶賛され、鳩山春子や山脇房子らに「是非、今度もこういう写真を盛んに作って頂きたい」と懇願されたという。この成功によってマキノは教育映画の製作に自信

をもったが、すぐに日活が危機感を持ちミカド商会を買収して、日活教育映画部にしてしまった。マキノは日活に戻り二年間、恩義のある横田のために映画を撮ることになる。

大正一〇年、京都の等持院に牧野教育映画製作所のスタジオが建った。ついに独立プロダクションを興したのである。

マキノは日活から引き抜く意志はなかったのだが、助監督や俳優・小道具・大道具・衣装等三五名がマキノに従い日活に辞表を出し、牧野教育映画製作所に入社した。監督では金森万象、沼田紅緑や俳優では若き日の月形龍之介などがある。同じ頃、大正映画が閉鎖し、東京から江川宇礼雄、内田吐夢・岡田時彦・猿与太平（古海卓二）が牧野教育映画に入ってきた。猿与太平こと古海卓二（一八九四—一九六一）はアナキストの大杉栄・ダダリスト辻潤・演歌師小生夢坊と交流のあった人物で、浅草オペラの台本を書いており、アナキストをひっくり返した「トスキナ」という劇を演出したことであるが、牧野教育映画に入る前に、大本教を題材にした『大本教・伏魔殿』（大正一一年）を製作し、映画監督の世界に入った人物である。大本教が京都府警に検挙されたことが世間を騒がしていた頃で、綾部にオペラ仲間とカメラを持って入り、一ヶ月をかけて全六巻を完成させた。大本教の信者が上映中止と抗議したことが、逆に宣伝となり、浅草の駒形劇場で公開してヒットしたという⁽⁸⁾。後年、映画会社を転々とするが、市川右太衛門主役の『旗本退屈男』を撮ったことで有名である。

このような個性的な人物が牧野教育映画製作所に集まったことによって、後の名監督や名俳優が育っていった。

四 真宗大谷派と映画宣伝

牧野教育映画が独立して『孝子養老』『児島高德』『小さな勝利者』を矢継ぎ早に製作したが、日活との退社時の取決めで、教育映画しか製作できず、一般の常設館では上映できなかったため、経営はすぐに厳しくなった。この事態を打開するためにマキノは家庭用映写機の製造販売を始め、映写機の買い取り先に教育映画の貸付をする方法を考え、その対象に各学校、寺院が選ばれたという。社内に地方巡回の映写班を組織して四国や静岡へ巡回したが、経営は好転しなかった。^⑤ 良い映画を撮っても興行が成功するとは限らないのが映画界である。マキノは悩んだ末に一年後、日活のための興行映画『火華』『噫小西巡査』『不知火』を撮影し、急場をしのいだ。教育映画を掲げて興した製作会社であったが、興行映画と並行して製作する経営方針にせざるを得なかった。

牧野教育映画製作所の経営事情を物語るエピソードがある。東西本願寺のどちらかは不明だが、本願寺委嘱映画を収めた際に、即日支払いを頼んだところ、土曜日で銀行が既に閉まったことを理由に断られた。月曜日に払うと言われたが、二ヶ月も給料を遅滞していた牧野側は本山の職員に喰い下がったため、奥から賽銭の入った数袋の^{かます}吠を運んできたという。その中の小銭を数えて大八車に乗せ、等持院まで引いて持ち帰り、社員の給料として分けたのであった。^⑩

マキノが宗教映画を多く撮った理由は、顧客を経済的に安定した仏教教団に求め、教団側も宣伝映画によって布教伝道の一助とする思惑が合致したためである。

真宗大谷派が活動写真を布教の手段として取り入れたのは大正一〇年ころである。真宗各派は立教開宗七百年紀

念を大正一二年に設定し、その教化の一環として活動写真を活用した経緯がある。現在の本山の機関誌「真宗」にあたる「宗報」第二四〇号（大正一〇年一〇月）に「立教開宗七百年を迎えて―宣伝の三要綱と記念事業の概要―」として

宗祖聖人が「教行信証」六巻を著して浄土真宗を興行あらせられてより、大正十二年は将に七百年に相当するので、真宗各派では、それを記念すべくそれぞれ準備に着手されているやうであります、わが大谷派本願寺では、同年陽春四月九日から一五日まで七日間、記念御法要を厳修せらるゝことに決定して、既に着々と準備を進められて居ります。

と宣言し、次の記念事業十種を設定した。

- 一、開宗紀念宣伝要項^マ
- 二、御消息の御発示
- 三、活動写真応用の宣伝
- 四、各教務所部下布教班の編成
- 五、寺院をして社会中心たるの運動

六、記念出版物の刊行

七、宗祖法宝物蒐覧会の開催

八、殉教者の表彰

九、宗内寺院出身者の結合

十、京都に記念会館の設立

その一、「開宗記念宣伝要項」は記念事業の精神を「祖徳鑽仰」「教旨宣揚」「宗門護持」を三要綱として掲げ、①「祖徳鑽仰」は真宗の教義を弘通して、他力の信念を決得せしめ、真宗開闢の鴻業を鑽仰する思念を喚起すること。②「教旨宣揚」は如来の願力に依憑して未来浄土の往生を期し、信後は念仏して法義を相続し、その恩徳に報いる生活をなすのは、即ち真諦の旨趣であるから、社会に奉仕し、進んで国運の消長、生活の安否は、国民相互の責任にあるを自覚し、国豊民安、兵戈無用の大益を実現するに努めること。③「宗門護持」は宗門の隆替は教学の弛張にあるが経費及び一派庶務に要する財政の途を立てず、ただ御門末に依頼しているだけでは不安定な状態なので、将来の安定を図るために基金を貯蓄する方法をとり、この基金と普通納金と合理的収入をはかり、大正一二年を期して記念の喜捨を募り、これを財団基金に充当して財政を堅実ならしむることとして、真宗興隆と財政再建も含んだ一大事業を打ち出した。本稿では各事業の詳細を省くが、「六、記念出版物の刊行」として『顕浄土眞實教行證文類』（大谷派本願寺編集課、大正一二年）の『御草本』と知られる阪東本をコロタイプ版として出版したことは、

画期的なできごとであった。この作業を監修したのは、次章に記述する沼法量である。^① 関東大震災以前に阪東本に触れた数少ない人物の一人であろう。

活動写真については次のような説明がある。

従来、低級なる趣味、卑俗なる娯楽機関として輕視されていた活動写真なるものが、今では社会、政治、教育、衛生その他各種宣伝の必須機関たるの地位を占むることとなり、応用範圍が益拡大されつゝある、随つてその品位と趣味とが向上されたことも、著しい現象であります。

依つて本山では之を宣伝の補助機関に應用すべく先づ本山の諸機関並に年中行事を撮影することとなり、別項記載の如く既に撮影を開始して居りますが、将来は偉人の憧憬、宗教信念の鼓吹、信仰生活、さては社会教育的方面の映写をも開始し、独立機関として各地を巡回せしむる筈です。

ここで「別項記載の如く既に撮影を開始して居りますが」とあるように既に活動写真の撮影はされていたようで、活動写真の試写は同年一〇月八日に寺務所内で「安居満講式」「火防噴水」「東宮殿下奉送」を所員一同が観覧し、その後、真宗大谷大学の講演会、真宗京都中学の運動会、久邇宮殿下兩堂御参拝の光景などを撮影したと報じている。この二ヶ月後の二月一七日には伝道部は布教班・活動写真班・文書伝道班の三班に分け、部長・参与・理事・評議員、特派使・書記・班長・主事の職員を設置した。布教班は各地方で布教伝道を行い、活動写真班は活動写真

の地方巡回を、文書伝道班は記念事業として出版される刊行物の編纂や編集、出版が主な仕事であった。伝道部・部長は寺務総長の阿部恵水、参与は和田圓什・関根仁應・月見覺了・河崎顕了・木津祐精ら本山の重鎮を置き、理事には監正科長の門地良成・編纂科主事の沼法量・録事の宮谷法含が事務を行った。実質的には理事が企画運営したと思われる。因みに、第一回活動写真の巡回は大正一〇年一月一八日姫路教務所で布教班発会式に講演会と共に映写したのが始まりである。この中で沼法量は映画製作に最も深く関わり、真宗大谷派が製作した『大和の清九郎』『日野左衛門』『信の力』『毛綱』の脚本を書いた僧侶である。

二 沼法量の映画脚本

一 沼法量の生い立ち

沼法量については、名古屋の信道会館で発行した雑誌「信道」（一九六九年三月）に略年表があるので、これに基づき考察をしたい。¹²⁾

沼法量は、明治一三年四月一五日愛知県海部郡牛田村（現・津島市）に父・猪飼義龍、母・ときの間に生まれた。示^{しめ}二と命名された。寺の言い伝えでは、猪飼家の祖先は三重多度の出身で海部郡に一族が開拓したという。地主であった猪飼義龍は真宗の信仰篤く、本山に参詣しては清掃をしていた篤信家で、いつの頃かは解らないがその信仰心を見込まれ、荒れ果てた朱雀坊（覚如の旧跡・現京都府下京区朱雀裏畑）を管理することを頼まれたという。

「信道」には示二、二三歳の時に法量と改名し、京都一中を経て真宗大学を二八歳で卒業したとあるが、筆者の調査では京都第一中学の卒業名簿には猪飼示二、または、法量という名は無い事から中退したと思われる。

猪飼法量の名が「宗報」で確認できるのは、明治三五年の東京真宗中学四年修了の記述である。⁽¹³⁾ 生年から換算すれば二三歳なので同級生と相当に年が離れていたことになる。真宗中学を明治三六年に卒業し、次いで真宗大学予科へ進み、明治三八年には真宗大学へ進んだ。

真宗大学に入ってから、同窓誌「無盡燈」の同人となり、俳句欄に毎号俳句を「夜濤^{やとう}」の雅号で投稿し始めた。

その後、兼好法師・沢庵・一遍・一茶を諸同人と共に人物評論を掲載し、「覚如上人の著書」を五回にわたって執筆している。⁽¹⁴⁾ 内容は覚如真選二九部の真偽、年代等について考証を試みたものである。この他に、清沢満之が創刊した「精神界」にも夜濤の雅号で俳句を二回投稿している。⁽¹⁵⁾

法量の信仰について、真宗大学一年の頃に伊藤証信の機関紙「無我の愛」（明治三八年一月二五日付）に「感謝」というエッセイが二回にわたって掲載されているので紹介しよう。

「無我の愛」は伊藤証信が真宗大学研究科に在学中に靈感に打たれ開始した創唱宗教「無我愛」の機関紙である。エッセイの内容は、無我愛運動と自身の宗教観についてである。法量自身も東京真宗中学在籍中に靈感に打たれたこともあったが、「一月位の寿命」であったという。その後、中江兆民の『一年有半』や村上专精の『大乘非仏説』を読んだが納得できず、信仰に行き詰まった中で、証信の一番弟子・安藤現慶に誘われ、証信の下宿先で開かれていた夜学会に通っていた。証信が法量と問答をしている時「君は寿命の一分間も延ばす事は出来ぬではないか」と

一喝され、自身の未熟さを自覚し証信の膝で泣き伏したという。その後も、証信のもとに毎日通ったが、親鸞も基督も孔子も超えた“無我愛”の真理には同調できず、親鸞聖人の弟子たる意義を与えてくれた証信に感謝するといふ内容である。証信はこの一ヶ月前に本山と真宗大学内で異安心として問題視され、無我愛運動を中止するように忠告されていたが、赤刷りの「無我の愛」を「脱宗号」として僧籍返上と大学中退を宣言した直後である。証信に對してエールを送ったのであろう。

真宗大学を卒業した法量は、本山の文書科録事となり、⁽¹⁶⁾「宗報」の編集発行を担当し、その他多くの本山出版書籍の執筆や編集に関わった。

明治四五年、猪飼法量は岐阜県大垣市郭町長勝寺の沼僧淳と養子縁組し、沼姓に改姓した。沼僧淳は本山の文書科長、清国布教監督となった本山の重鎮で、晩年は、大垣教務所監理となり濃尾大震災で倒壊類焼した大垣別院開闢寺の再建に尽力した僧侶である。僧淳は妻との間に子がおらず、本山で法量の才能に惚れて養子として迎えた。法量は生家の猪飼家の一人息子であったため、躊躇したようだが、僧淳の「死んだら住職をしてくれ」という願いを受け入れたという⁽¹⁷⁾。同年、長勝寺の副住職となったが、昭和元年まで京都に住み、本山に奉職した。この間、大正一一年に擬講に進み、大正一四年一柳知成内局で参務を努め、後に教学部長となった。著書には『宗祖大師御法語』『句仏上人』『往生論註講讃』『真宗故事成語辞典』（共編）などがあり、真宗の教学にも精通していた。

沼法量は俳句の他に、絵を星野空外に師事し、文化人としての一面があった。大谷句仏（光演）の主宰する俳句雑誌『懸葵』の編集も行い、俳句を通して多くの文化人と交流するようになった。句仏には句会を通して全国に後

援者がいたが、真宗僧侶の沼法量・寛潮風・名和三幹竹は熱烈な句仏支援者として有名であった。昭和初年に本山の財政逼迫の責任を取る形で句仏が法主を追われ、限定相続となったときに反対運動の急先鋒として働き、法量は句仏に殉じて本山の職を辞したのである。在世中に句仏より夜禱庵の御染筆を受け、辞世の句に「句仏上人まします浄土に我は往く」と詠んだと寺に伝わる。晩年は『句仏上人全集』を執筆していたが、未完のまま昭和二八年六月二十七日、胃癌のため逝去した。七四歳であった。

沼法量が映画製作に関わる事になったのは、大正九年に本山の命で文部省主催の第二回社会教育講習会に出席したことによる。沼法量著『社会映画劇 信の力』（法蔵館、大正一三年）に「映画劇製作の思い出」として、

（前略）今から四年前の一と夏、文部省社会教育の講習会に出て、活動写真の内容について聊か知ることが出来、京極へも出かけても教育的映画について注意を払うようになっていたが、大正十一年の春、幸いに開宗紀念の映画宣伝として漸く具体化さるゝに至ったのである。

その頃、東京の模範活動写真会社が一万数千尺の親鸞聖人伝映画を製作するについて、台本の検閲を求めて来た。映画台本なるものを手にしたのは、これが始めてであったが、映画劇については全然門外漢の私は、ただ史実に基づいて二三ヶ所を訂正したに過ぎなかった。

曾て松竹蒲田撮影所長であった田口桜村氏が撮影監督として、東京から俳優や技師や道具方衣装方を召し連れて東六条の旅館を陣取り、叡山や東山の寺院を背景に、近日いよいよ撮影にとりかかるから、俳優連中に各

役割についてお話をしてくれと申し込まれた（後略）

と回想している。この模範活動写真会社が撮影した映画は『大親鸞』として文部省推薦映画となった。法量は映画監督・田口桜村に同行して映画撮影の現場に立ち会ったことが、映画の脚本を書くきっかけとなった。因みに田口桜村は黒柳徹子の伯父である。⁽¹⁸⁾

二 宗教映画『大親鸞』

浄土真宗が大正一一年にむけて立教開宗記念事業を立ち上げたことは既に述べた通りであるが、この時期に親鸞ブームが起こっていたことも見逃してはならない。大正六年に発表された倉田百三の戯曲『出家とその弟子』は、キリスト教的な信仰を含んだものであったが、教学にとらわれない独自の解釈を織り込み、以降の宗教文学に大きな影響を与えた。大正一一、二年には多くの親鸞を描いた戯曲や小説が発表され、石丸梧平の戯曲『人間親鸞』や三浦関造の『親鸞』などが代表的な作品である。戯曲『出家とその弟子』や『人間親鸞』の宗教劇も人気を博し、多く上演された。

『大親鸞』を製作した模範活動写真株式会社は、実業家の黒井直良が興した映画会社である。明治一二年新潟県越後高田に生まれ、長野中学を卒業後、鉱山事業に従事し、のちに東京製織会社の社長となり、模範活動写真株式会社・京越商会株式会社の社長の外、日本軍需商工株式会社の重役をする一方、東京芝区議会議員でもあった。⁽¹⁹⁾典

型的な成金である。

第一次世界大戦後の好景気によって事業で成功した実業家が、自身の名声を得るため社会教育や修養団体に資金を投じることが美徳とされた時代でもあった。教育映画に資金を援助した例は多くあり、黒井も熱心な真宗門徒であったことから、この映画を製作したと考えられる。

『活動雑誌』（活動雑誌社、大正一二年一月）「模範活動写真株式会社製作の『大親鸞』映画所見」には、

越後高田の人で、熱心なる真宗の信者で、同時に同宗の弘通に尽力している黒井氏が、多年の苦心と尽力によって、田口桜村氏監督、生田目経徳氏の立案、伊藤大輔氏の脚色、酒井健三氏の撮影の下に、親鸞聖人一代記の映画「大親鸞」一五巻を完成した（中略）内容は親鸞聖人の九歳の時に出家から始まって叡山の修学、南都法隆寺に遊学、（中略）太子堂に参詣と霊夢、再び叡山に於いて苦行、法然上人を師としての成道、月輪関白家の姫君と結婚から、僧侶の肉食妻帯より生じた他宗の反対と迫害、越後へ流罪、赦免、東北地方に巡錫と先ずこんな具合に順序がついている。

とあり、生田目経徳は原作『親鸞聖人活動写真脚本』（非売品、大正一〇年）を書いており、東京朝日新聞では『大親鸞』が「全十五卷三十三章が完成した」と報じ、生田目の『親鸞聖人活動写真脚本』が三十四節で構成されていることを考えると、これを脚本に撮影したと考えられる。一説には、松竹の伊藤大輔が「松竹本社教育部長・

井上宅治の委嘱により「親鸞」というシナリオを執筆した⁽²¹⁾とされるが、松竹の脚本を退社した田口が持ち出せたのか疑問が残る。

生田目の脚本によれば、親鸞が稲田の草庵で大法談をした場面で終わり、字幕に「龜山天皇の弘長二年十一月廿八日三条坊門前里小路（今の御池柳馬場）の善法院に於て大往生の奇瑞を現レ九十歳の高齡を以テ入寂せらる」と出た後、親鸞の廟所実景、そして字幕「明治九年十一月二十八日勅して見真大師の諡号を賜う」と映され、親鸞の肖像画が映写された後、画面に「南無阿弥陀仏」と映り終幕するものであった。

この『大親鸞』全一五巻は撮影期間二年、フィルム一万三千尺、ロケーションは二府五県の大規模なものであった。製作費には巨額の費用が投じられ、三万円を費やしたと「中外日報」⁽²²⁾は報じている。中外日報の広告欄に「東本願寺及西山本山真宗各派御後援」と載っていることから真宗各派から資金の一部が拠出した可能性があるが詳細は不明である。いずれにせよ、真宗寺院を顧客に想定していたと考えられる。

東本願寺で五月八、九日に封切試写を行い、五月一三日から一五日まで築地本願寺、五月三一日から東京国技館で封切したという。一〇月三〇日には東京神田の明治会館で試写された。おそらくこの時期は試写上映であり、一般公開は真宗青年会主催で一月二六日から二月二日まで東京本郷座で封切した。その後、「中外日報」によれば、市村座で二月三日から七日まで公開し、九日から一〇日まで浅草阪東報恩寺で開演する予定であると報じてられている。『大親鸞』は連日盛況で、板敷辯圓の場面で橘旭紘の筑前琵琶の弾奏が好評を得たという⁽²⁴⁾。

当時の新聞各紙、キネマ旬報も『大親鸞』の製作段階から報道するなど、巨費を投じて作られた『大親鸞』は世

間から注目され、叡山のシーンで僧侶が靴を履いているのが映り込んだことや、親鸞を演じた牧野憲二について注文がつくなど批評されたが、全一五巻という大作はおおむね評価された。

三 東本願寺委嘱映画『大和の清九郎』『日野左衛門』『信の力』の製作

東京の模範活動写真株式会社製作『大親鸞』の公開は教育映画の可能性を提起するうえで大きな転機となったことは事実であるが、問題も少なからず露呈した。長編映画は、巡回映画としては長すぎるということである。色々なトリック技法を使い、工夫を随所に凝らしたものであったが、五時間を超える映画は途中で眠気を誘うものであったという。『宗報』（大正十一年六月五日付）に「最近に東京某制作会社の親鸞聖人伝五巻」を地方巡回に加えた記事があるが、おそらく、『大親鸞』を部分的に組み合わせたものであろう。

同じころ、仏教グループや各宗派は映画を製作し、西本願寺では『稲田の草庵』を、浄土宗では『開宗の後』を牧野教育映画で制作していた。なお、御園京平『マキノ映画全作品目録』には『稲田の草庵 大和平九郎』とあるが、西本願寺委嘱映画の『稲田の草庵』と東本願寺委嘱映画の『大和の清九郎』を混同したものと思われる。

東本願寺の映画宣伝班は、本山の実景や年中行事、東宮殿下参拝の様子を撮った実写物と牧野教育映画の『山之内一豊の妻』や『十字路』を購入し、これらを組み合わせて地方巡回を行っていた。教団の内外から布教上参考にならないという意見もあり、沼法量も『大親鸞』の映画製作に関わり、脚本の構想を練っている矢先に、西本願寺と浄土宗の映画は完成された。法量も、これらの作品を見て、「これなら自分で出来よう、否、どうしても作らな

ければならぬと決心した⁽²⁵⁾」という。法量は、真宗の信仰を体现する妙好人・大和の清九郎を主題に脚本を書き、『大和の清九郎』（全三巻）を牧野教育映画で製作した。『稻田の草庵』が四月ころに公開されてから、わずかな期間でマキノ省三が監督・撮影をこなし、六月一日、『大和の清九郎』は婦人法話会館で封切公開された⁽²⁶⁾。

大和の清九郎は多くの逸話が残り、「毛虫の清九郎」とまで嫌われた放蕩無頼の清九郎が妻の死をきっかけに人格を転化した所に注目し、親鸞を主題にするよりも野人の人生に現われる人格を表現した方が良いという意図で脚本したという。地方の門徒には「清九郎さんは、仏様のような妙好人じゃと、わしゃお説教で聴聞しているが、何かいな、しまいには悪人になってしまわっしゃたのかいな」といって不審がったという⁽²⁷⁾。

次いで、紡績工場の女工を扱った現代劇『信の力』の製作に取り掛かることとなる。この経緯を法量は次のように回顧している。

『清九郎』の時代劇映画は出来た、今度は現代ものを作ってほしいという声が、地方巡回の宣伝使から頻りと叫ばれた。自分も何か少し大きいものを作りたいと志したが、先立つものはお金、殊に劇は何分にも一尺何円という割で莫大な費用がかかるので、そうした予算もなく困っていた揚げ句、ある日のこと。『工女を主役にして面白い宣伝映画劇を作りたいと思いますが、その費用を出して下さいませんか』

こんなことを大阪の大日本紡績会社の重役なる田代重右衛門氏に話し込んで、漸くにして出来上がったのが全五巻の『信の力』であった。（中略）紡績の広告になるようでもいかぬし、それに画面に坊さんを出したり

して、本願寺の所謂宣伝映画臭いものにしてしまっても面白くないので脚色には苦心した。工女の生活を知るために工場内は勿論、寄宿舎に泊まってみた。脚本も出来、さてこれによいとなって牧野名監督に相談した。自分も実地の経験を積むため、俳優の選定やロケーションにも当り、撮影には監督を手伝うような仕事をしてみたいと申し込んで快諾を得た。

分量は脚本の製作のために、大日本紡績会社の各工場に映画の構想に合う経歴の女工がいなか問い合わせたところ、滋賀県出身の娘が父親の放蕩で一家の窮乏を救うために女工になったという話を聞いて、それを参考に脚本を書いたという。父親の設定を兄に変えた理由は、観衆の中に同じ境遇の人があれば、親を怨むことになり、かつ教化上に鑑みても宜しくないと判断したからである。映画の検閲がまだ厳しくない時期だが、家族制度に触れるのは自主規制したと思われる。この他、博奕の場面は警察が許さないので、シルエットで表現する一幕もあったという。

この映画の内容は、琵琶湖畔の貧乏な家に病気の母と、兄弟が住んで居るが、兄は父の遺産を食いつぶし、博奕や酒に溺れていた。主人公の孝行娘「お菊」が家の借金を払うために女工となり、信仰によって模範女工と表彰される。やがて放蕩三昧の兄が改心し、お菊は以前から慕っていた村の好青年との縁談が決まり、さらに預けていた債権が当たって「尊い犠牲的精神に報いらるゝ其の日が来た」と字幕が出て、一家は救われ、ハッピーエンドというものである。

この脚本をもとに、監督はマキノ省三が行い、主人公の妹役にはマキノの娘・恵美子が出演した。撮影は、牧野スタジオの他、滋賀県の霧囲気を出すために、竹生島が背景になる場所を探し、尾上や彦根でロケーションを行った。さらに大日本紡績会社の大和高田工場や、工女の団体参詣の場面では東本願寺を使用し、エキストラは女工を使うことが出来たので順調に撮影が進んだ。

『信の力』の公開は大正一二年二月一日、京都岡崎の公会堂で有料公開され、三五〇〇人を数える観覧者が詰めかけ、大谷大学の洋楽部の伴奏を加えて上映した。同月二日には東京久邇宮邸で『信の力』と『大和の清九郎』を各宮殿下の台覧を行い、翌日、霞が関で前法主光瑩が観覧し、二五日には文部省で『信の力』を試写して、推薦映画として選定された。その後、各寺院の地方巡回のほか、大日本紡を始め、鐘紡、東洋紡、合同紡、辻紡のほか各紡績製糸工場を巡回し、資金を出資してくれた大日本紡績会社はフィルムを三、四本焼増して各地を巡回したという。次いで、模範活動写真株式会社で『日野左衛門―親鸞聖人外傳其一―』（全四巻）が製作された。

日野左衛門の故事は親鸞が越後から常陸へ下向して教化の途次、大雪の日に弟子と共に日野左衛門の館を訪ねるが、追い出されて門の止め石を枕に寝てしまう。日野左衛門は夢告によって親鸞と気付き、懺悔して親鸞の弟子となるというもので、原型は願楽寺宗誓撰述『遺徳法輪集』及び先啓了雅著『大谷遺稿録』『大門山石枕寺記』である。近世以降、親鸞の東国時代の出来事として伝えられる二十四輩聖跡の伝説の一つである。この物語を有名にしたのは、倉田百三の『出家とその弟子』である。おそらく、法量なりに、解釈しなおしたと考えられる。

法量は日野左衛門が北面の武士であったという事から話を広げ、御所での騒乱から常陸国へ落ちていくことを考

え、この時、日野左衛門に父を殺された「常時」と、兄を殺された「雪野」という夫婦が敵討ちをする設定を加えた。ラストシーンは、改心した日野左衛門を探し当てた常時が仇討ちの中で雪野を誤って殺してしまう。常時は自身の過去の所業に目覚め自害しようとするが、親鸞が現れて常時と日野左衛門に「願力の無窮は罪業の深重をば恐れない。一とたび広大無辺の大慈悲に摂取されたとき、無始本有の罪業は浄化され、そこに歓喜と安住の世界がさながらに展開せられるのである」と説法し、二人は安貞元年春に出家したところで終幕する。

『日野左衛門』の公開がいつ行われたのか不明だが、「宗報」の記述をもとに推定すれば、大正一二年七月ごろには完成したと思われる。⁽²⁸⁾ 法量は、いずれの作品も調査期間を別にすれば、一、二日で脚本を書き上げたというから、驚くべき文才の持ち主であった。

これらの巡回映画に、『現如上人御葬儀』や『開宗記念法要』、法量が関東に撮影技師を伴い『関東二十四輩聖跡』の実景などが撮影され、巡回映画の中に加わった。映画の地方巡回は満一年で五七〇回以上の公開を行い、平均二千名が観覧したという。この状況に本山も立教開宗事業の臨時のものであったが、映画班を常設することとなった。⁽²⁹⁾

三 毛綱の製作

一 北米同朋慰問

次に取り組んだのは、『毛綱』の製作であった。法量は、本願寺を支える「本末一致」を表現する作品として、

両堂再建のために女性の髪を木材運搬の綱として寄進した故事をもとに芸術的純映画の製作を試みたという。

法量は、大正一二年一〇月ころ、北越の調査に出かけ、脚本の構想を練っていた。ところが、翌一三年一月、本山から北米同朋慰問とアメリカに於ける社会教育映画、キリスト教の社会情勢の視察を命じられ、ハワイ島とアメリカ本土に渡ることとなる。この視察に大澤圓麿宣伝使を伴い、本願寺製作映画と子供用に牧野教育映画『山内一豊の妻』を借り受け上映した。『大和の清九郎』『信の力』は好評だったという。⁽³⁰⁾ 法量は、『バクダッドの盗賊』で名を挙げた上山草人やユニバーサル社の舞台装置を担当する細川篤雄や早川雪州の敵役で活躍した山本冬郷らに面会し、その紹介で各映画会社のスタジオを廻った。ハリウッドの巨大な資金力と大仕掛けの製作を目の当たりし、驚かすにはいられなかったという。アメリカ滞在中に観覧した『モーゼの十戒』『十戒』に感化され、帰国後は、『モーゼの十戒』のやうな大規模を『毛綱』映画にと夢見ているわけではないが、太子堂の再建、挙国一致のお取持ち、毛綱の製作といったように、取り扱っている対象がかなり大きいので、勢いスケールは出来るだけ大きくすることを要します」と大規模な映画を製作する方向へ転換した。

法量は渡米の間に『毛綱』の脚本を書き上げる予定であったが、遂に出来ないもので、『毛綱』の脚本を懸賞として募集することとなった。この懸賞に五〇本の応募があり、視察中の法量のもとに脚本の小包が届けられ、視察中に目を通したという。

大正一三年一二月、北米視察を終えて日本に帰り、東亜キネマと日活の監督らに依頼して選定し、最終的には山本牧彦の『信仰の毛綱』が原作として採用された。この脚本に法量が史実を織り込み、全五巻の『毛綱』の脚本は

翌年六月ころ完成した。松竹の下賀茂撮影所長・野村芳亭を安田力寺務総長と共に訪ね、映画化について相談をしつつあったが、この企画は立ち消えてしまう。

この時期、東本願寺では債務問題が浮上していた。一柳知成が寺務総長となった時に参務となった法量は、教学部長を命じられたが、わずか数ヶ月で大谷句仏（光演）の投機事業が焦付き、法主を追われた、いわゆる「句仏事件」の責任を取る形で本山を辞めてしまったため、『毛綱』の製作は、しばらく中断することとなったのである。

二 『毛綱』の製作

本山を辞任した法量は、京都の財産と朱雀坊の土地を整理して、養子先の岐阜県大垣の長勝寺に移り、住職となった。法量にとって地縁も血縁もない所で、周囲の寺院から好意的に受け入れてもらえなかったという。本山でエリートコースを歩み、洋行帰りの僧侶として浮いていたのであろう。曾我量深や大谷句仏を招き、子供を集めて句会を開くなど、文化人としての一面があったものの、法量は俳句の創作や芭蕉の研究に熱中し、葬式よりも句会を優先する住職であったという。

昭和三年の夏ころ、本山で中断していた『毛綱』の製作の機運が盛り上がり、予算も付いたことから、法量は脚本をさらに校正し、『毛綱』全八巻を完成させた。⁽³¹⁾ 映画製作会社を選定するのにどのような過程を経たのか不明だが、法量が京都に住んで居た時に、「法量の子息と澤村貞子やマキノの子供と遊んでいた」⁽³²⁾ というから家族ぐるみの付き合いがあったことも、マキノプロダクションに映画製作を頼んだ一因かもしれない。法量も少なからず映画

製作に関わるが、後を継いだ宣伝課主任・竹中慧照が取り仕切ることになる。⁽³³⁾

『毛綱』は指揮マキノ省三、吉野二郎が監督し、撮影は石野誠三、主役の僧了念を児島武彦、お里を三保松子他、マキノ潔（春本富士夫）、大林梅子らが出演した。マキノ省三が“指揮”となっているのは、このころマキノは病床にあり、監督の一線を退いていたからである。昭和三年『実録忠臣蔵』の編集中に居眠りしたためフィルムに火が燃え移り、自宅とフィルムを焼失したことからマキノの会社は大きく傾いた。スター俳優・阪東妻三郎や市川右太衛門はそれ以前に退社し、後に入った、嵐長三郎（寛寿郎）、片岡千恵蔵ら五〇数名が一举に退社し、無名俳優だけが残った。この状況下で製作したのが、大ヒットしたマキノ正博監督『浪人街』である。集団劇という手法は苦肉の策から生まれたものであった。沈みかかっていた会社で奮闘していたのが早撮りで知られる吉野二郎（一八八一—一九六四）であり、⁽³⁴⁾『毛綱』に出演した俳優陣であった。“指揮”マキノ省三と銘打ったのは、映画界でのマキノの存在を表に出すことによって、一つのブランド的価値を示すためだと考えられる。それほどマキノ省三の存在は映画界で大きな影響力を与えていたのである。

毛綱の故事は、元治元年に本願寺兩堂が焼失し、兩堂再建のため全国から寄進を集めた際、巨大な建材を運ぶために綱を使用したのが、従来の綱は切れてしまったという。そこで古来より伝わる女性の生髪を麻紐と一緒に縄に編み込んだ“毛綱”をもって巨大な建材を曳いたというものである。東本願寺には五三本の毛綱が越後を中心に寄進され、二四筋現存している。⁽³⁵⁾ 史実としては、毛綱を使ったという言い伝えはあるものの、どこまで綱として実用的なものであったか不明である。富山県砺波市刀利の材木曳く際には竹の繊維を混ぜて作った綱や藤の皮を綱にした

という。⁽³⁶⁾ 金銭の余裕のない女性たちが信仰心と本山への助成の気持ちの証として毛綱を献じたとされる。

「真宗」の広告欄に「映画『毛綱』の梗概」としてあらすじが記載されているので引用しよう。

物語は北国の雪に埋もれた村から始まる。東本願寺の使僧了念は本山再建の布告を斉して雪の北国を巡回している。篤信の與衛門は若き頃、両親の遺骨を収むべく妻と共に都に上った。折も折、都は兵乱の巷と化し、本願寺は遂に炎上し、與衛門夫婦は僧了念の助けによりて辛くも九死に一生を得た。幾星霜の後までも與衛門は本山再建のことを願っていたが、遂に病のため斃れた。與衛門の弟丈五郎は酌婦のお辰に迷い妻のお里を虐待した。

東本願寺の再建の布告が、北国一円に伝わるや、人々は報謝のために争って浄財を寄進し、巨材を献納することを惜しまなかった。かくて村人は山に入って巨材伐採の勞力奉仕にいそしんでいる時、丈五郎は借金のため、村の悪党熊藏に強いられ、お辰と共に姪のおみえを誘惑せんとして重傷し、熊藏はおみえの許嫁久吉を殺さんとして却って久吉に救われ、共に善人に立ち帰った。再建用の巨大なる材木運搬に幾度となく綱が切れて今は方策がなくなった時、村人等は「今は毛綱を作る外に策はない」と提唱した。

女の生命と云うべき髪の毛！しかし報謝の念厚き篤信の婦女達は惜し気もなく、その黒髪を、ぶつ、つり、切つて御佛のために献げた。そうした血と涙と命の結晶である毛綱によりて巨材は運ばれ、さしもの東本願寺両堂再建の大工事も完成を告ぐるに至り、今は京都東六条の天地に巍然として雲に聳^{そび}へえているのである。

ラストシーンは、本山の一番虹梁が不足しているという話が全国に伝わり、村の言伝えて、川岸の村社に樗の巨木が埋まっていることを思い出し、掘り返すと巨木が現れる。その巨材を村人全員で法量が作詞した「木遣り音頭」を歌い、一番虹梁を曳く場面で終幕するといったものである。

ロケ地には新潟県直江津を始め、伊勢や嵐山、山科別院、争乱の場面では東本願寺を使うなど、大掛かりなものであった。当初、本山境内で夜間撮影する予定であったが、ライトの照明が思った通りにいかず、昼間に撮影することとなった。電柱や電線の問題から白州の阿弥陀堂南の土塀を背景に戦乱のシーンは撮影された。近代建築の駅前物産館（後の近鉄ブラッツ）が映り込んでしまったため移動式の撮影台を作成し、俯瞰で撮影したという。官賊両軍と俳優を含めて二百名と、馬二・三頭、大砲五・六門を用意して撮影に臨んだ。大砲に火薬を使うため、警察署の許可に手間取ったという。この撮影によって見物人が二千以上に膨らみ、烏丸通りの御門前には交通巡査が通行整理する状態であったという。⁽⁴⁷⁾

ラストシーンの撮影には、越後の一番虹梁の伝説をもとに、川岸の神社を探し回った結果、岐阜県養老郡（現・大垣市上石津町一之瀬）の牧田川に面した、長彦神社で撮影を行った。この撮影には、大勢のエキストラが必要であったが、『寺院録』調べた結果、隣村の牧田村に大谷派の寺院が六ヶ寺あることが判明し、牧田村・常法寺の住職が三〇〇人のエキストラを集めることで解決した。一番虹梁には長さ一〇間、周囲二七尺のハリボテを現地で製作し、野良着に東本願寺の五環紋（お印）が赤く染め抜かれた白手拭いをエキストラに被らせて、無事に撮影は終了したという。

昭和四年七月一日、『毛綱』京都岡崎公会堂で封切した。「中外日報」の記事には「ストーリーそのもののスケールが小さ過ぎている」⁽³⁸⁾「あからさまな勧善懲悪主義の羅列とコンベンショナルな型の如き善玉悪玉の人物や性格の採用に墮し過ぎる」⁽³⁹⁾との批評が相次いで掲載され、原作者の山本牧彦も批判する事態になった。アメリカで製作された『十戒』や、キリストの生涯を映画化した作品『キング・オブ・キングス』など無声映画でありながら斬新な演出を取り入れた映画が輸入された結果、宗教映画に対する受け止め方が変わっていたのである。法量はこの批判に對して、製作費用が少額だったことや、あくまでも文芸映画でも興行映画ではなく、宣伝映画であることを論じた。⁽⁴⁰⁾

「中外日報」の追加記事には「毛綱」の映画各地で大もて」とあり、宗派内では好評であったという。⁽⁴¹⁾

この批評に関して、原作や脚本の問題もその一因であるが、撮影過程においてもマキノプロダクションの経営状態が影響していた。演出を大規模なものにするならば、おのずとセットに製作費を投入しなければならない。内田吐夢監督『大菩薩峠』ではラストシーンで机竜之介が川に飲み込まれるシーンでプールをセット内に拵えた例があるように、特撮も一つの見せ場である。セットを使用するには使用料が莫大に掛るため、マキノはこの費用を捻出できないほど窮乏していた。ロケーションが多くなったことも批評の一因であろう。

映画が公開されて間もなく、マキノ省三は同年七月二五日、過労と老衰による心臓麻痺によって逝去する。五二歳であった。マキノプロダクションは息子マキノ正博が後を継ぐが、昭和六年に解散し、その後、正映マキノ（昭和七年）、マキノトーキー（昭和一〇—一二年）を興すが以降、正博は独立プロダクションを興すことはなかった。

むすびに

『毛綱』が製作された時期は、関東大震災後の復興とともに起こった映画ブームのなかで、時代劇やプロレタリア映画、道徳映画、宗教映画、シュールリアリズムを表現した映画など多彩な映画が関西を中心に製作され、浅草は連日盛況であったという。大衆文化として映画は、市民の要求に応えるものであった。昭和四年以降、昭和恐慌の煽りを受け、中小プロダクションが大資本映画会社に吸収合併を繰り返し、またトーキー（発声）映画へ移行するなど、大きく変化していく。満州事変の起こった昭和六年頃から、国策映画が撮られ始め、『肉弾三勇士』などが製作されていた。

戦前に宗教教団が映画を製作した例は、数多く確認できる。⁽⁴²⁾ いずれも教祖の功績や教会的信仰を喧伝するために製作されたものである。しかし忘れてはならないのは、その中にも国家の制限が課せられていた事実である。大正一四年に内務省警保局による映画検閲が本格的に始まり、昭和一四年には映画法が制定されるなど規制の中で映画は作られた。戦後、GHQが時代劇を禁止したことは有名なことであるが、この伝統は民間でつくる「映倫」として現在まで続いている。真宗大谷派が製作した映画は、安寧秩序を遵守し、皇室を誹謗しないという制限のもとに作られた映画であった点で、表現の自由、信仰の自由が守られたものではなかったのである。真宗大谷派の宣伝映画の地方巡回がどの時点で終わったのか不明であるが、昭和一二年以降、本山機関誌「真宗」に映画宣伝班派遣の

広告が掲載されなくなった時期と考えられる。本山では「戦時教学」が盛んに説かれた時期であった。

昭和三六年、吉川英治・原作、中村錦之助（後に萬屋錦之介）・主演『親鸞』『続・親鸞』（東映）や、三國連太郎原作・監督『親鸞 白い道』（昭和六二年、松竹）など親鸞の思想を在家の立場で映画は表現された。そのほか、熱心な日蓮信者であった大映社長・永田雅一が企画した『日蓮と蒙古大襲来』（昭和三三年、大映）や『釋迦』（昭和三六年、大映）などの大作が製作された。北大路欣也・主演『空海』（昭和五九年、東映）など記憶に新しいが、興行面で成功した例は少ない。時代劇とは異なり、勧善懲悪のように単純な構図で映像化することが難しく、信仰的展開に重点を置けば娯楽性に欠ける映画となるためである。

日本の宗教映画の多くは、アメリカ映画『十戒』のような大資本で製作されたものではなく、道徳家や篤信家の援助を受け製作された。マキノ省三も熱心な金光教信者であり、良心的映画の製作を試みるころから、ドラマ性と宗教観の一致を模索する苦悩が始まったといえるだろう。

映画を媒体とした布教活動は、娯楽と布教の整合性が問われる。その点では、集客性が二の次となり『十戒』のようにはいかなかった。最近、大谷哲夫・原作『ZEN・禅』（二〇〇九年、配給・角川映画）のように歌舞伎俳優を用いてその禅堂の神秘的魅力は伝えられても、興行的には振るわなかったという。宗教映画の製作と興行はなかなか一致しないところに次回作の製作には繋がらない面がある。『毛綱』は果敢にも、その挑戦を果たした長編の第一作であった。

注

- (1) 田中純一『日本映画発達史Ⅱ』（中央公論社、一九八六年）参照。
- (2) 田中純一『日本教育映画発達史』（蝸牛社、一九七九年）三九頁。
- (3) 注（2）前掲書、一七一—一八頁。
- (4) 牧野守『日本映画検閲史』（パンドラ社、二〇〇三年）九一頁。
- (5) 田中純一『日本教育映画発達史』（蝸牛社、一九七九年）五五頁。
- (6) 「宗報」第二四八号（宗報発行所、一九二二年六月）一五頁。
- (7) 御園京平『改訂版マキノ映画全作品総目録』（発行・御園京平、一九八七年）四頁。
- (8) 竹中芳「古海卓二」『日本映画監督全集』（キネマ旬報社、一九八〇年）三五一頁。
- (9) 桑野桃華『日本映画の父 マキノ省三伝』（マキノ省三伝発行事務所、一九四九年）八六頁。
- (10) 注（8）前掲書、八九頁。
- (11) 「宗報」第二四三号（宗報発行所、一九二二年一月）一九—二〇頁。
- (12) 「信道」第二五卷三号（信道会館、一九六九年三月）二六頁。
- (13) 「宗報」第十三号（寺務所文書科、一九〇二年八月）六頁。
- (14) 『無盡燈』第十三卷第二号（無盡燈社、一九〇八年二月）、第四号、第五号、第八号、第一一号に掲載。
- (15) 「精神界」第七卷六号（浩々洞、一九〇七年六月）及び第七卷一〇号（一九〇七年九月）。
- (16) 「宗報」第九〇号（寺務所文書科、一九〇九年三月）五頁。
- (17) 長勝寺住職・沼秋香氏、談。
- (18) 田口桜村については藤元直樹氏の「田口桜村―謎の松竹キネマ蒲田撮影所長」（『映画論叢』³³）国書刊行会、二〇一三年）に詳しい。
- (19) 『現代実業家大観』（御大礼記念出版刊行会、一九二八年）日本人物大系第三五卷、皓星社刊、二〇〇〇年。
- (20) 拙稿、「松井不朽―名古屋経済界の異端児「天皇とタバコは日本を滅ぼす」」（『トスキナア』第八号（皓星社、二〇〇八年）一〇—一六頁。

- (21) 伊藤大輔『時代劇映画の詩と真実』（キネマ旬報社、一九七六年）三三三頁。
- (22) 「中外日報」（一九三二年五月一二日付）。
- (23) 「宗報」第二四七号（宗報発行所、一九三二年五月）二〇頁。
- (24) 「中外日報」（一九三二年二月一日付）。
- (25) 沼法量「映画劇製作の思い出」『社会映画劇 信の力』（法蔵館、一九二四年）一九六頁。なお、この著書には『大和の清九郎』『日野左衛門』『信の力』の脚本が収録されている。
- (26) 「宗報」第二四八号（宗報発行所、一九三二年六月）一五頁。
- (27) 注（24）前掲書、一九八頁。
- (28) 「宗報」第二六二号（宗報発行所、一九三三年八月）一六頁。
- (29) 「宗報」第二六一号（宗報発行所、一九三三年七月）二一頁。
- (30) 「宗報」第二七〇号（宗報発行所、一九三四年四月）二六頁。
- (31) 沼法量「毛綱」の製作さるゝまで「真宗」第三三二号（大谷派本願寺宣伝課、一九二九年六月）三〇—三二頁。
- (32) 長勝寺住職・沼秋香氏談。
- (33) 竹中慧照「毛綱」撮影内輪話1—6「真宗」第三三三号—第三四〇号（大谷派本願寺宣伝課、一九二九年七月—一九三〇年二月）に詳しい。
- (34) 『日本映画監督全集』（キネマ旬報社、一九八〇年）四四八頁。
- (35) 柏原祐泉「両道の再建と復興」『明治造営百年 東本願寺・下』（財団法人真宗大谷派本願寺維持財団、一九七八年）一〇六頁。
- (36) 『真宗本廟（東本願寺）造営史—本願を受け継ぐ人びと—』（真宗大谷派宗務所出版部、二〇一一年）三九二頁。
- (37) 竹中慧照「毛綱」撮影内輪話4「真宗」第三三六号（大谷派本願寺宣伝課、一九二九年一〇月）二〇—二三頁。
- (38) 「映画「毛綱」試写を観る」「中外日報」（一九二九年〇月付）。
- (39) 岩倉政治「映画「毛綱」観評」「中外日報」（一九二九年〇月付）。
- (40) 夜濤「映画「毛綱」を脚色して（上）」（一九二九年七月二六日付）及び「映画「毛綱」を脚色して（下）」（同年七月二七

日付)。

(41) 「中外日報」(一九二九年七月二五日付)。

(42) 復刻版『映画検閲時報』(不二出版、一九八五年) 参照。

付記 本稿の執筆に際して、沼法量については長勝寺住職・沼秋香氏、『大親鸞』及び田口桜村に関し

て藤元直樹氏に助言を頂きましたことを、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。